3 9年ぶりに書籍新刊を出版

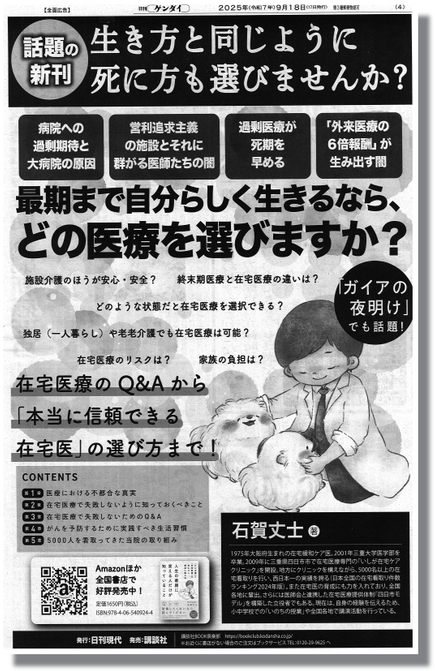
「がんにならないように」「がんになったときに」「在宅医療で失敗しないように」25年間の医師経験で得たものを集大成として書きました。ぜひ多くの人に読んでいただきたいです。

厚生労働省が推奨する書籍にも選定されました。

日刊ゲンダイでもたびたび全面広告してくれています。



アマゾン、全国の書店で好評発売中!!



日刊ゲンダイで掲載された全面広告

看護師だより

「叶えたい」を力に



「もう、外に出ることは叶わないかもしれない」。病と向き合う中で、そう感じてしまう方もいるかもしれません。実際にベッド中心の生活を送られていたＫ様もその一人でした。

しかし、Ｋ様には**「遠くへ旅立つお孫様を空港で見送りたい」**という強い願いがありました。この目標が、リハビリに挑むＫ様の何よりの原動力となりました。医療・介護の多職種スタッフ、温かいご家族、そして**「ねがいの車」**の連携による**チームケア**が、その願いを実現へと導きました。



念願のセントレア空港で、ご家族皆様で「病気に勝つ」という願いを込めた味噌カツを召し上がられました。そして、お孫様を出発ゲートまで見送るという、かけがえのないひとときを迎えられました。

私たちは、病気や介護が必要になっても、「やりたいこと」や「楽しみ」を諦める必要はないと考えています。温泉に行きたい、映画に行きたい、希望を口にすることが力になります。諦めてしまう前に一度、訪問に伺わせていただいているスタッフに話してみて下さい。

第48回 日本死の臨床研究会年次大会（盛岡）に参加して

湘南鎌倉総合病院の佐藤忍先生らのポスター発表「独居がん患者とペット～最期まで心穏やかに過ごすための終活～」を拝見しました。

猫を飼う独居がん患者が、最期まで愛猫と共に生きようとする姿が紹介されており、医療チームはその想いを尊重して支援されていました。発表を通して、ペットを通じて自分の終活を考える糸口になること、そして「家族を支える」中にペットも含める視点の大切さを学びました。

私は医療事務として直接支援に関わることは少ないですが、患者さんの背景に寄り添う姿勢を大切にしたいと思いました。学会後には、盛岡名物の冷麺をいただき、心もお腹も満たされました。

医療秘書　石賀比奈子

【言薬（ことぐすり）】

病の床にある人、絶望の底に沈む人を救うのは、医療でも宗教でもなく医療者の言葉。その言葉は人に大きな影響を与える、言葉が薬になる。それを“言葉”という。“言薬”には４つあると大坂巌（おおさか　いわお）先生は提言されています。

①「しかし、人生はまだ長い」　②「大丈夫」　③「ありがとう」　④「よくがんばりました」

普段、何気に使っている言葉が、あるときは“薬”となります。対人援助を生業としているケアマネジャーは「言葉」には気を配ります。以前、つらくて苦しすぎると訴える方のそばで、かける言葉が出ず肩や背を撫でることしかできなかった私がいました。そっと手を止めた時「ありがとう」と声をかけていただいた。ピンと張っていた心が一瞬ほどけた“言薬”でした。その後も忘れることがない大切な“言薬”になりました。言葉は、「希望や安心、感謝、承認」を届ける最上の薬です。みなさんは“言薬”をもっていますか？周りのかたがつらいときはそっと施してみてください。きっとそのことばは“言薬”となって痛みを和らげ心を穏やかにし幸福な気分にしてくれるとおもいます。

ケアマネジャー　清水あけみ



